

聖書箇所：ルカの福音書 6章 20～26節

説教題：貧しい者は幸いです

1 常識がひっくりかえされる

私たちはみことばを聞いても、多くの場合すぐに忘れてしまいます。でも、ときどき記憶に長くとどまるみことばに出会うことがあります。今日の箇所に出て来る「貧しい者は幸いです」も、そのひとつでしょう。というのは、私たちの常識とは正反対のことが言われているからです。これだけではありません。「飢えている者は幸いです」、「泣く者は幸いです」も同じです。私たちは、貧しくなりたくないからいままで一生懸命がんばって生きてきました。泣きたくないから、そうならないように努力してきました。それなのにイエスは、貧しくなれというのでしょうか。いや、そこまで要求しているわけではないかもしれませんが、それでもなお貧しいことがなぜ幸いなのか理解できないままです。

イエスはいったい何をお語りになろうとしているのでしょうか。

2 貧しい者

そのことを考えていくために、まずこのイエスのことばがいったい誰に向けられて語られたのか、その事から確認してみます。20節から26節まで、よく読んでみましょう。何と書かれているか。「あなたがた」と書いています。

あなたがたとは具体的には誰のことか。これも20節に書いてあります。「イエスは目を上げて弟子たちを見つめながら、話された。」弟子たちを指しています。同じ弟子た

ちに対し、ある場合には「貧しい者」と語り、後半では「富む者」と語っています。貧しいことと富むことは正反対の状態です。普通、両方が同時に起きることはありませんから、これはどういうことなのかとなります。

そうしますと、いったいイエスが語る「貧しい者」とはどんな状態なのか。そこまで戻って考え直さなければならぬことが気がつきます。

私たちは「貧しい者」と聞けば、すぐに「お金のない人」と考えます。「富んでいる者」とは、お金持ちのことを指す。そう考えて疑いません。確かにこの「貧しい」と訳されていることばには、そのような意味があります。しかし実はそれだけではありません。他の意味でも使われています。

ヤコブ書2章5節です。「よく聞きなさい。愛する兄弟たち。神は、この世の貧しい人たちを選んで信仰に富む者とし、神を愛する者に約束されている御国を相続する者とされたではありませんか。」

この「貧しい人たち」とは誰のことでしょうか。お金がなく、食べるものもない。もちろん、そのような人たちも指します。しかし、もしそれだけだというのなら、どうなりますか。教会には、本当にお金に困っている人しか来られないことになる。でも現実はどうですか。もちろんお金に困っている方も来られます。でも、そうでない方もたくさん来られます。

いますぐお金に困っているわけではないのに、どうして私たちは教会に来ているのでしょうか。教会には何か大切なものがあるから。お金よりももっと大切なものがあるはずなのに、自分はその大切なものを持っていなかった。その大切なものをいただきたいと思って教会に導かれてきた。ひとことで言えば、そういうことではないですか。

私たちがいま礼拝に集いながら、退屈と思うことはあるでしょう。でも、ばかげたことだとは思わない。むしろ大切なことをしていると思うのはなぜですか。大切なものをいただきたいと願っているからでしょう。それは言い換えれば、その大切なものが私にはないという切実な思いがあるから、わざわざ日曜日の朝来ているのです。

イエスが言われているのは、まさにその事です。私には大切な何か欠けている。それがイエスの言う「貧しい者」です。私たちは、大切なものに「飢え渴いて」教会に来ます。このままではいのちを失ってしまうと思い、私たちは「泣いて」います。

そんな私たちにイエスは語りかけてくださいます。「貧しい者は幸いです。神の国はあなたがたのものだから。いま飢え渴いている者は幸いです。やがてあなたがたは満ち足りるから。いま泣く者は幸いです。やがてあなたがたは笑うから。」

3 弟子たちの心の中にあること

(1) 私は富んでいる

ここまで前半部分のことを取りあげてきました。もしここで終わっていただければ話は簡単でした。しかし、後半の厳しいことばが付け加えられています。なぜ厳しいことばをお語りになるのか。それについても触れておかな

ければなりません。

先ほど、これらのことばは同じ弟子たちに向けて語られていると言いました。イエスはいつも慎重で配慮に富んでおられる方ですから、弟子たちのことを心配してお語りになっていると考えてよいでしょう。

何を心配しておられたのでしょうか。いま弟子たちはどんな状態でしょうか。前回の箇所では、イエスが山に登られ、そこに弟子たちを招き、その中から十二人の使徒たちを選んだところを見ました。山から下りてくると、大ぜいの人々が待っています。イエスの衣に触れるとたちまちに病気がいやされ、汚れた霊が出て行きました。

自分が十二人の使徒の一人に選ばれたと考えてみてください。大学受験と同じです。多くの競争と訓練を乗り越え、選抜試験に臨み、合格発表の時に自分の受験番号が掲示板に掲示されている。その合格できた学校は、いまや人々がうらやむような人気の的になっている。こんなうれしいことはない。前途洋々、天にも昇る気持ち。この世のすべての望みを手にしたかと思う瞬間です。それが弟子たちの状態です。

イエスが、そんな弟子たちの霊的な状態を見逃すはずはありません。イエスは警告しているのです。「あなたがたはいま自分は富んでいる者だと思っているのではないだろうか。いまずべての望みを手に入れたかのように満ち足りているのではないだろうか。いまあまりのうれしさに笑っているのではないか。人々から、『イエスのお弟子さんですか』と言われてほめられようと思ってはいなかったか。あなたがたは、何を見ているのか。使徒に選ばれたことですか。イスラエル王国の大臣の椅子のことですか。それが大切なこ

とだと思っているのですか。そのようなものはむなしいものに過ぎない。あなたがたはすべてのものを失うときが来ます。そのとき、あなたがたは悲しみ泣くことになります。」

(2) 失うとき

ではいったい、いつ使徒たちはすべてのものを失うことになるのでしょうか。イエスが十字架におつきになったときです。それまでは、この方こそ自分たちの将来の望みをすべてかなえてくださると信じて疑っていませんでした。ところが、突然にイエスは抵抗することなく、逮捕され裁判にかけられ、時をおかずに十字架にかけられていきます。それでももしかしてこの方は奇蹟を起こし、十字架から降りられ、大逆転の勝利をもたらすかもしれないと期待しました。しかし、何も起きません。惨めな姿でイエスは死んでいかれました。弟子たちはどうしたか。みな逃げて隠れてしまいました。自分たちの誇りとしていたもの、未来を託していたものすべてを失い、彼らはあわれな者になり、泣く者となりました。

4 イエスは目を上げて

(1) 低くなられるイエス

イエスは、弟子たちの霊的な状態を心配し、あえて厳しいことばをお語りになります。弟子に対し厳しいことばを語るのですから、普通は上から下に向けて語っていると想像します。でも、20節を見てください。「イエスは目を上げて弟子たちを見つめながら話されました。」「目を上げて」とあります。目を上げるのはどうしてですか。イエスが弟子たちよりも低いところにおられるからですね。

イエスは高いところに立って、まるで指導

者であるかのように、あるいは組織の上役のように語ったわけではありません。弟子たちよりも身を低くされて語っています。それだけではありません。22節にこうあります。

「人の子のため、人々があなた方を憎むとき、あなたがたを除名し、辱め、あなた方の名をあしざまにけなすとき、あなたがたは幸いです。」

やがて弟子たちに起こることを語っているようです。しかしよく考えてみてください。このような目にあった方がいたのではないか。イエスご自身です。人々はイエス・キリストを憎みました。人々は、イエスを自分たちの共同体から追い出し、除名しました。人々の前で辱めを受けられ、十字架につるされてもなお、人々はイエスをあしざまにけなしました。

貧しいという経験もしたことのない人が、「貧しいものは幸いです」と言っても、だれも心を寄せないでしょう。飢えた経験のない人が「いま飢えているものは幸いです」と語っても、何の説得力もありません。心の底から悲しくて泣いたこともないのに、「いま泣く者は幸いです」と語っても、誰も信用しません。

イエスは、十字架ですべてのものをお捨てになり、下着まではぎとられ、貧しくなれました。父なる神の愛から切り離されたとき、愛に飢え渴きました。父なる神が答えてくださらなかったとき、御子イエスは涙を流されました。

(2) イエスの問いかけ

私たちは、イエスから問いかけられているのではないのでしょうか。あなたは、自分を富んだ者とするのか。それとも貧しいものとする

るのか。もちろん、みなさんは心の中で「私は貧しい者だ」と考えているでしょう。しかし、本当でしょうか。「私は貧しい」と口では言いながら、なお私たちは握っているのではないか。それは何ですか。自分の誇りとするものでしょうか。これだけは人よりも勝っているという自信でしょうか。能力ということなのか、あるいは形あるものなのか、あるいは自分がやってきた業績でしょうか。地位でしょうか。ひとことで言えば、とにかく自慢できるものと言ってもいいでしょう。

「私はすべてを手放しています」と思っているのなら、自分自身に問いかけていただきたい。これを手放してしまったら、もう自分は生きていけない。具体的に一つ一つのことを思い起こし問いかけてみてください。例えば、「いま家や仕事を失ったらどうなるか。」

「いま健康を失ったらどうなるか。」「いま家族を失ったらどうなるか。」

私自身、いつも心のどこかで質問しています。本当に手放すことができるかどうか。正直に申しますと、手放すことの難しさをいつも感じています。

そんな私たちにイエスは言われます。「あなたがたはやがて飢えるようになる。」「あなたがたは、やがて悲しみ泣くようになる。」

意地悪な神なのでしょう。なぜこんな事を言われるのでしょうか。私たちが大切にしているものなど大したことがないからです。いつかは消え去っていくむなしいものだからです。私たちのいのちを助けることができないからです。

私たちは、『自分は貧しいものだ』と思って、ここに座っているはず。そのことを思い出していただきたいと思うのです。どこにこの貧しさを満たすものがあるのか。どこ

に悲しみを笑いに変えてくださる恵みがあるのか。

主以外にはありません。